

第2回「文学の中のお嬢様」

大阪府立大学教授 堀江 珠喜 先生

今日はお嬢様のお話ですが、私が思うお嬢様は令嬢です。私は神戸女学院で中学から修士まで12年間学びました。いまは分かりませんが、当時の中高部では、生徒は令嬢扱いされていました。これはすごいことだと思います。私の記憶に間違いがなければ、神戸女学院の中学の合格書類に、このたびは御令嬢を預かるにあたってどうのこうのと、生徒のことを御令嬢とプリントに書いてありました。それを見て私はびっくりしました。日常生活で御令嬢という言葉を見つけたのが初めてだったんです。母については、結婚式の招待状や年賀状などで、何々様御令室様というふうに、御令室様という言葉は見ることはありましたが、御令嬢って私のことなのと。「これから私は御令嬢なんだ」といった驚きがありましたから、この記憶はたしかだと思います。

当時の中高部で、生徒は、本当にお嬢様という位置付けでした。特に女の先生が保護者に向かって、その人の娘について話すときには、「お嬢様は」という言い方をされました。保護者参観で後ろに並んでいるお母さま方に先生が呼びかけられるときにも、お嬢様方がどうのこうの、皆さま方のお嬢様方はこうこうでというふうに、生徒の前でも「お嬢様方は」という言い方をされていたので、お嬢様にならなければならないんだ、お行儀良くしなければならないんだ、言葉遣いも改めなければならないんだと思うことが、自然な環境にありました。保護者との個人懇談、母と先生と一対一の懇談会のときでも、私は堀江珠喜なので、「珠喜さんは」とおっしゃる先生もおられました。お嬢様は」とおっしゃる先生が、特に女の先生には多かったと聞いております。

一つ面白い話があります。私の2年程上の方の話です。神戸女学院は中高部が私服です。当時、最初はパンツ系の服は駄目でしたが、途中からよくなりました。パーマネットは昔からオーケーでした。ただ、ヘアダイは駄目でした。ですが、いくら校則でパーマネットはオーケーといっても、いまと違いますから、45年ぐらい前に中学2年生の娘がパーマネットをかけたいとお母さんに相談したら、当然、ちょっと待ちなさいとなるのが普通ですね。周りの公立の娘さんと比べたら、それだけでなく私服で派手なのに、そのうえパーマネットをかけるの、という感じで、担任の先生に相談にみえたそうなんです。そのときの担任の先生が、岡田先生とおっしゃる、どちらかという日本語より英語の

方が達者な方だったのですが、その岡田先生がお母さまに対してこうおっしゃったそうです。「お嬢様がパーマメントをおかけになりたいとおっしゃる」この言葉遣いがすごいですね。「お嬢様がパーマメントをおかけになりたいとおっしゃる、それはお嬢様がご自分にパーマメントがお似合いだと思いいになるからではございませんか。一度かけさせておあげになったらいかかですか」。これは普通の公立の中学では考えられないですよ。お嬢様扱いもされませんし、中学2年生でパーマをかけるなんてとんでもないことだと言われるでしょう。お母さまにしてみても、いくら規則でオーケーとはいえ、ちょっとまだ早いのではないですかというようなことを言ってもらえると思って、多分、先生のところに相談にいらしたんだと思いますが、お嬢様がかけたいというなら、かけさせておあげになったらいかかですかという返事だったわけです。神戸女学院はそういうところですよ。

神戸女学院の中高部では、在学中はお嬢様扱いされましたが、かといって甘やかされるというわけではありません。お嬢様なんだからとは言われませんが、しかるべきマナーは守れ、あるいは言葉遣いは敬語を使えるようにしなさいというプレッシャーはなんとなくありました。

大学の英文科に入ると、今度はレディー扱いされました。ペーダー先生というアメリカ人の男性がおられました。その先生の授業には絶対にスカートををはいていかないとはいけません。そうしないと教室から追い出されるんです。「Get out」といわれる。遅刻も認めないし、スカートでないと駄目という方でした。先生に質問に行くときも、スカートををはいていかないと相手にされない。レディーはスカートををはくものである。パンツ系をはいてはいけません。でも、ディートリッヒの大ファンでいらしたので、ディートリッヒはパンツをはいているじゃないですかと言うと、「彼女は別」といわれました。みなさんはレディーです。レディー扱いしますから、レディーらしい振る舞いをしなさいということで、彼の授業は絶対スカートでないと駄目でした。

ですから、スカートををはいていくのを忘れたらどうしようということで、彼の授業を取っている学生は、みんなロッカーに予備のスカートを置いていたと思います。まさかのときのために。あるいは、早めに座ってズボンをたくし上げて上着で隠してスカートのふりをしたりしました。また、職員の方で同じぐらいのサイズの人に泣きついて、そのときだけスカートとズボンを交換してもらって授業を受けたというクラスメートもありました。それぐらいさく言われるんです。スカートををはいていないとレディーでないというわけではありませんが、スカートををはいていると、ズボンのときとは座り方が多少違います。立ち居振る舞いが、多少は違って来る。それが日々のことで異なってくるというのは、この年になると「ああ、そうかもしれない」とは思います。

ペーダー先生は、さすがに我々にうるさいだけあって、私どもをきちんとレディー扱いしてくださっていました。神戸女学院のキャンパスは渡り廊下が多いんですね。ご存知なければ、うろうろしてみてください。渡り廊下のたびにドアがあるんです。この学校はとてもドアが多いんです。ペーダー先生は、必ずレディーファーストでした。私どもがペーダー先生と歩いていて、ドアが半開きになっていて一人しか通れない状態だと、やっぱり先生どうぞと先に通っていただいて、私が後からというのが当然のことだと思ってドアの前で待っていると、先生も待っていらっしゃるんです。先生はレディーファーストで、私が先に通らないといけないと思いついていらっしゃいました。二人でじっと「After you, After you」になるわけです。全然進まないんです。先生が、「Ladies first」とおっしゃるものですから、「Thank you」と言って先に通りました。そのように、レディー扱いをされる以上は、こちらもレディーとして振る舞わなければならないわけです。

もうおひと方、日本人の先生では、茂先生というチャプレンをしていらした方がレディーファーストでした。ドアを通るときには、必ず私を先に通してくださいました。他の先生のごことはあまり覚えておりません。

お嬢様、レディー、それがイコールかどうかは別にして、お嬢様という日本語について、皆さま方はどんなイメージを持っていらっしゃるのでしょうか。これは考えないで、ぱっと思い付く言葉が、いつももっているイメージだと思います。お嬢様という言葉の前に何々な、例えば、きれいなという形容動詞、美しいという形容詞、あるいは神戸の、芦屋のという装飾語のお嬢様、何でもいいので5秒以内にぱっと頭のなかにひらめいたものが、ご自分のいつも本当は思っているお嬢様イメージだと思います。形容動詞、形容詞はお分かりですね。このあいだ、慶應義塾大学文学部仏文科卒の夫に形容動詞と言ったら、「それ何」と言われました。例えば、きれいなとかでしようと言うと、「それは形容詞と違うの」と言われたんですね。違う、変化しているでしようと言うと、「へえ」と言われました。慶應義塾大学はそのレベルなのね、ふんと思いました。

では、5秒間でお嬢様という言葉の前に何が付くか何か思い浮かべてください。何でもいいので一つです、お嬢様。はい、1、2、3、4、5、はい終わり。何か思い付いたと思います。深く考えないで結構です。ぱっと出てきたもので結構です。もし当てると、いい格好しないといけないとか、笑われてはいけないとか、私が思っているようなことを言わないといけないとかプレッシャーがかかるといけませんので聞きませんが、皆さま方がいま思い浮かべたものが皆さま方のお嬢様イメージと思ってください。このやり方はわりと役に立ちます。例えば、何でもいいんです。アメリカであれば、自由な、にするか、厚かましい、にするか、大国の、にするか。何にしてもそのもののイメージを一

体自分はどういうふうを持っているのか、無意識のうちにですよ。それを見極めるのにわりと良い方法です。

さて、皆さま方がお嬢様についてどんな言葉を入れたかはどうかがいませんが、これについて、芦屋の山手町に住んでいらっしゃる83歳のご隠居さんにおととい聞いてまいりました。どんなイメージですかと言うと、まず、「おきれいなお嬢様」とすぐに言われました。「お」が付くんですよ。きれいなではなく、「おきれいな」です。あるいはお美しい、お優しい、全部「お」が付くんです。でも、世の中には美しくないお嬢様もいらっしゃるじゃないの。みんながきれいとは限らないから、不細工な人はどうするんですかと言ったら、「不細工なのはお嬢様ではない」と言われました。これをもう少し深く分析してみますと、美しいかどうかというのは、非常に基準が曖昧なんですね。若い、若くないかを、例えば、50歳を境にして若い、若くないと決めるのであれば、戸籍年齢の50歳というのははっきりしていますよね。50歳、60歳、70歳にするかは別にして。この年齢で若い、若くないかを決めるのは、ものすごくはっきりしたライン、基準があります。でも、美しい、美しくないというのは、何も定規を持ってきて鼻の高さを調べるわけでもなく、いま小顔ブームですが、顔のこの部分が何センチ以上はブスというわけでもなく、見た目ですよ。逆にいうと、若い、若くないは、線引きが年齢でできますが、若く見えるか、見えないかは、当然ながら、見る人によって違います。それから、きれいに見えるか、見えないかというのも、見る人によって違ってきます。実は、こんないい加減なものはありません。

不細工な女はお嬢様ではないとおっしゃった山手町のご隠居さんの言葉を深読みしてみると、お嬢様は不細工であっても、不細工に見えないのがお嬢様なんだろうと思うんです。というのは、何か錯覚させるものがある。それはその方の優しさであったり、持っている雰囲気であったり、オーラであったり、あるいは物腰であったり、品の良い服装であったり、上品な言葉遣いであったり、そういうものの総合点として、「おきれいな」「お美しい」ものに見せるということではないかと思えます。逆にいうと、美しい方が下品な言葉を使うと、より一層下品に思われますので若いお嬢様方はご注意あそばすように。

では、坊ちゃんの方はどうかと言うと、その方は、「賢い坊ちゃん」と言われたんです。その方の坊ちゃんというのは、灘高校、東京大学と行っていらっしゃいます。自分の身内にいる坊ちゃんが賢いから、「賢い」が自動的に出てきたと思えますが、「賢い坊ちゃん」と言われました。

皆さま方も坊ちゃんという言葉の前に何が入るか遊んでみてください。私はお嬢様という言葉の前には「わがままな」という形容動詞を入れます。わがままなお嬢様です。坊ちゃんについては、頼りない坊ちゃんを入れます。なぜか

というと、身内にそういう人がいるからです。わがままなお嬢様というのは、私の母のことです。1920年生まれで、4年前に86歳で亡くなりました。この人はわがままでした。夙川で育ち、幸い神戸女学院ではなく梅花女学校の出身者でしたが、わがままでした。その兄というのは頼りなかったんです、お坊ちゃん。だから、兄妹そろってわがままなお嬢様、頼りないお坊ちゃんという身内です。

わがままの「わが」は、我という字を書きますね。わがままといのは悪い言い方ですが、自己主張が強くて自己を持っている、自分というものはつきりと持っているということです。それに振り回されて周りは迷惑するわけですが、ある種、自分を持っていることは、そう悪いことでもないかもしれないとも思えます。先ほど申し上げたペーダー先生は、授業でいつも「Be yourself」とおっしゃいました。「自分自身であれ」とおっしゃいました。この「self」というのは、なかなか日本人は持っていて表に出す勇気がなかったりします。個性的なものが良いといいながら、人と同じものを着て安心感を持つ。人と同じことをして快適であるという、「self」がどこへ行ってしまったのかということが、このごろ特に多いと感じます。そのなかで、自己を持っている、わがままであろうが、「我」を持っているというのは、それはそれなりにお嬢様の特性なのかもしれないと頭のどこかに入れておいてください。

物語のお嬢様というのは、我とか自己を持っています。そうでないと、お話になりません。ただお美しい、お優しいお嬢様がいらして、おとなしくて、人の言うままにずっとお幸せに最後まで生きて死にましたではお話にならない。そこで、どこかに何か葛藤があったり、何かがあったときにこの我が出てくる、自己が出てくるのです。それがどこまで強く出てくるかということが、結構お嬢様のやり方ではないかと思うのです。つまり、何か起きたときに、それに向かって積極的に動く、あるいは反抗する、ものに動じない、あるいは別の生き方を見付けるという強さを持っているのがお嬢様なのです。その強さというのは、教育や教養、あるいは親から受け継いだDNAかもしれません。これらは多くの場合、ある種、財力、斜陽族であったとしても、それまでの財力、お金に裏付けられている場合が多いんです。だからお嬢様なんです、そういう部分がお嬢様が出てくる文学の特徴であると思います。

さて、また山手町の話に変わります。山手町のご隠居さんは典型的な男性で、お嬢様というのはお美しい、おきれいだ、ある種のあこがれを持っていらっしゃる。だから、自分があこがれる女性は、お美しく、お優しくて、おきれいでないといけないわけです。私がこの学校にいたときは神戸女学院というと、お嬢様学校というふうに、いい意味でも、あるいは揶揄される意味でもいわれておりました。いまでもそのイメージは、私の年齢以上の方は持ってい

らっしゃいます。私は、24歳まで神戸女学院におりまして、それから神戸大学にまいりまして男社会に入れられ、27歳で学位を取りました。この岡田山の自然に育まれた平和な女の園で世間知らずにいたところから、神戸大学の男社会に入って、そのあとは普通の日本の社会に入ったわけですから、それから見るとやっぱりここはお嬢様の空間だったなと思います。

学歴といったときには、最終学歴をいうことが多いですね。私の最終学歴は、神戸大学大学院博士課程修了なんです。これだとはっきりいって男性にもてません。神戸大学を出ていてもね。ところが、神戸女学院で中学から修士までおりましたと言うと、とたん相手のおっちゃんの目の色が変わるんです。神戸女学院は僕のあこがれでしたと。そうですかあ、みたいな感じで、神戸女学院でございまあすと、こちらもちよっと様子も変わるんですが。これを利用しない手はない。ですから、今日の私のプロフィールもそうですし、本を書いたときの後ろの著者紹介もそうです。最終学歴ももちろん書きますが、お許しいただける限り、神戸女学院で中学から修士まで学ぶと書かせていただいております。本来ならば、神戸女学院の大学だけでもいいと思われるかも分かりません。ただ、これはちょっと嫌な言い方ですが、私にしてみれば、ここの中学の入試に合格したというのがものすごいプライドなんです。なぜかという、いま神戸大学の博士課程を受けてもおそらく通ると思います。悪いけど、ここの英文科を受けても通ると思います。でも、いまここの中学を受けたら絶対滑ります。99.99パーセント滑ります。当時も通ったことが不思議なぐらいですから。それぐらいここの中学に入ったことに対するプライドはすごいものがあります。嫌なことですが、そうなんです。だから、中学からと書くことにしております、そうするとお嬢様扱いをしていただけて、それをとても利用しております。神戸大学でも同窓会でかわいがっていただいておりますし、それはそれでありがたいことです。別に神戸大学というのは、出して恥ずかしい学校名ではございませんが、ただ、やっぱり神戸女学院を出たというのは私の誇りなのです。

お嬢様に対してはあこがれだけでなく、男女とも何か安心感というものがあると思います。これは神戸女学院だけでなく、この周囲のお嬢様学校と呼ばれているところはすべからくそうだと思います。私の家の近所に眼科があり、女医さんです。待合室に、どここの医学部出ましたという最終学歴、神戸大学医学部卒まで書くのはごく普通ですが、その方は小林聖心女子学院の高校卒から書いていらっしゃるんです。何で高校から書くのと思いますが、小林聖心女子学院を出ていると聞いただけで、それこそ、おやさしいお嬢様、ゆつたりと育ていらっしゃる、がつついていないと、こちらはなんか安心感があるんです。というのは、うちの慶應義塾大学出の夫の目が真っ赤になったときに、その眼科に行ったんですが、そうしたらその先生が、「大丈夫です。放つとい

ください。お薬も差し上げません」と、一番患者さんに対して安上がりに済むように配慮してくださるんです。ところが、別の近くの眼科へ行くと、いろいろ検査されるんです。そういうことをうちの夫が経験しているので、小林聖心のあそこへ行こうと言うんです。あそこはお嬢様育ちで金取り主義じゃないからいいと。そういう奇妙な安心感があると思います。

それから、お嬢様仲間の仲間意識みたいなものがひょっとしたらあるかもしれません。私も夙川に生まれ育って神戸女学院を出まして、いまは芦屋に住んでおりますが、そうしますと、小林聖心女子学院出身、東京聖心女子大学にいらした方もいらっしゃいますし、甲南女子大学の方、神戸海星女子学院の方がいらっしゃる、何かそういう方たちとは同じマンション内でも仲間意識が生まれるんです。これも変な話というか嫌な話ですが。そういうような仲間意識みたいなものもある。奇妙なもんだなと思います。

今日の講演は「文学の中のお嬢様」についてです。新聞の報道によると、まず『朝日新聞』には、神戸女学院が舞台として登場する文学作品と書いてありますが、私はこう言った覚えはないんですけどね。神戸女学院はあまり舞台にならないんです。神戸女学院生、あるいは元神戸女学院生は主人公や登場人物になります。『読売新聞』は、同大学が文学作品でどのように描かれてきたかと書いてあります。ないわけではないんですが、そもそも文章で場所というのは描きにくいものです。有名な場所はいいですよ。金閣寺といわれたら誰でも金閣寺をイメージしますね。こまごまとしたことを言わなくても、金閣寺という話は運びやすいです。でも、神戸女学院で学んだ者は良いですが、そうでない人はこんな複雑なところをぐちゃぐちゃ書かれたら、訳が分からなくなるはずですよ。

一昨年前にミステリー作家の篠田真由美さんが東京から来られて、キャンパスを見たいとおっしゃるのでご案内しました。やはり卒業生の方が裏話や昔の話をからめてお話しできるのでいいかなと思ってあちこちをご案内しました。その方は古い建物、古い洋館を舞台にした作品を書くのが好きな方なんです。ですから、ご案内していて、講堂の前のこのあたりに死体発見はどうですかみたいな、死体発見場所を私も一生懸命考えたんです。まだ作品にはなっていないようですが、神戸女学院を舞台にした「なんとかなんとか殺人事件」というのが出たらうれしいなと思っております。そのときには、私の協力があったということをお思い出していただければうれしゅうございます。その方の作品をほかにも読みましたが、やっぱりお屋敷とか、知らない建物の構造を文章で読まされたら訳が分からなくなるんです。図は書いてあるけれども、それを見ても分からなくなると、これは読解力がないということ、私の頭が悪いこと、半分読む気がないという三つの理由によりますが、だんだんどうでもよくなってき

ます。どうせ私に関係ない事件だしと思って、読むのをやめようとかやめてしまう場合があるので、場所は描きにくいのです。

その点、映像の場合は、パンと画面を出したら終わりですから、神戸女学院だって空撮でパンとやったら終わりです。これは描きやすいんですが、人間の内面を映像で描くのは大変だと思います。逆に文章の場合、人間の内面というのは、作家の腕によりますが、これは描ける。むしろ、場所よりは人間を描く方がやりやすい。それが文学の特徴だと思います。

神戸女学院出身者の方は、キョウコ・モリという名前を聞かれたことがおありかもしれません。キョウコ・モリとはモリキョウコさんで、1957年生まれの私よりも2学年下になられる方で、中学から英文科の大学2年生まで神戸女学院にいらっしやいました。20歳のときにアメリカの大学に行かれて、そのままアメリカで大学を卒業して勉強を続けられてアメリカの大学の先生になりました。そして小説をお書きになりました。しかも英語でお書きになりました。それを別の日本人が翻訳しています。片仮名書きの『シズコズ・ドーター』という小説が1993年に発表されました。『めぐみ』という本のもとのタイトルは『One Bird』、一羽の鳥でしたが、日本語タイトルは『めぐみ』です。めぐみというのは主人公の名前でもありますが、同窓会の方はご存知のように神戸女学院の同窓会誌の名称がまさに『めぐみ』です。『めぐみ』が出版されたのが1996年で、1997年ごろに『悲しい嘘』が出版されました。いま日本で日本語のものが手に入るのはそのぐらいだろうと思います。ひょっとすると神戸女学院には英語の原文、それから日本語のものもあるかもしれません。その作品には、結構、神戸女学院のこと、それこそキャンパスの中が描かれています。

神戸女学院では中学のことはJといいまして、高校のことはSといいますが、彼女は、私がJ3のときにJ1で入ってきて、S3のときにS1だった。それから私が大学3年生のときに大学1年生として入ってきたわけですから、同じ空間を行ったり来たりしていたはずの人です。同じ時代の同じ空間、そしてほぼ同じ先生方との交流を共有する可能性があったわけです。そういう意味で私にとっては興味深いのですが、そうでない方にとって果たして興味があるかどうかという問題があるわけですね。

この方は、神戸女学院中学に合格した直後にお母さまを亡くされます。自殺でした。神戸女学院の入学を待たずして、お母さまが自殺されたんです。これは実話です。どうして自殺されたかということ、お父さまの浮気が原因です。そのあとほどなくお父さまが浮気相手の方と再婚されたので、当然、家庭内はぎくしゃくしていく。彼女も非常にかわいそうでした。金銭的には裕福な暮らしをしているけれども、10代の思春期の一番複雑なときにそういうことを経験するわけですから、大変な思いをしていたということは想像に難くありません。

その体験を基に書かれたのが『シズコズ・ドーター』、静子というお母さんの娘という意味です。そのなかにちらっと中高部の家庭科のサカキ先生という先生が出てきます。サクラ先生という先生がいらしたので、知っている人間からいうと、これはサクラ先生のことねとか、これは聖書のクボタ先生のことねとかいろいろ思いますが、そうでない方は分からないだろうな、その面白さはないよねと。それから、分かっている人間としても、あくまでこれはフィクションであって、ノンフィクションではありません。ですから、神戸女学院を舞台にしているといったところで、すべて実際と同じではありません。校舎の配置が少しずつ違います。体育館の裏に家庭科のお料理に盛り付ける花や葉っぱを取りにいったって、生物の部屋の横を通っていく場面がありますが、これも嘘です。構造的に動線としてあり得ません。内部を知っていると、こんなことないよなど、これ違うよなど。違うということは文学の価値を低くするものではありません。むしろ、高めるものです。その方がいいと思うから、作者は変えているわけですから。だけど、実際の校舎の配置を知っていたら、これ違う、こんなふうに通るわけじゃないじゃないと思ってしまうんですね。キョウコ・モリさんとほぼ同時代の方々は、一度お読みになると面白いかなと、そういう面白さはあるかなと思います。

2作目の『めぐみ』では、両親が別居している、母親はまだ生きているという設定です。やっぱり生きていてほしいという希望、願望があったからでしょうが、夫婦が別居している状態で悩みながら女学院に通うんです。「女学院に通えるのはうれしかった」と言いますが、この女学院は、最初の名前が神戸女学院としていなくて、芦屋女学院となっているんです。芦屋女学院。だけれど、一回だけ芦屋女学院というのが出てくるだけで、あとは全部女学院、女学院、女学院なんです。当時、神戸女学院の省略は女学院でした。神女なんていったことはございません。外部でまったく神戸女学院に関係ない方は、神女とおっしゃったようです。女学院こそが神戸女学院の略で、そうでなければKCです。ちなみに、関西学院のことはGと言っていました。KGのGです。なぜか甲南女子はUSで、甲南はOSというのが、われわれのときの省略でしたが、それはともかく、女学院、女学院とずっと女学院と出てきます。そして、「女学院に通ったのはうれしかった」と言っています。

なぜうれしかったかというと、こういうことを言っています。「私は真面目な生徒だから、女学院の先生方はほとんど何でも許してくれる」と。これは先ほど申しましたように、「パーマメントをかけさせておあげになったらいかかですか」ということですから、大抵のことは許していただきます。「年がら年中規則を振りかざしたりはしない」とありますが、本当にその通りでした。「その代りに、自由、尊敬、愛という三つの言葉を使う。神を敬い、隣人を愛する限り、

私たちは自由な意思での行動をして良いのだというのだ。神を敬うという部分を除けば素晴らしい考え方だと思う」とあります。「神を敬うという部分を除けば」というのは私が言ってるんじゃないですよ。キョウコ・モリさんが言っているんです。私が先ほど申しましたように、私たちは自由な意思で行動して良いのだと。つまり自分の意思を持っている、我を持っている、自己を持っている、そういう教育を神戸女学院はしてきたわけです。

次の3作目の『悲しい嘘』になると、アメリカでちゃんと大学の先生という自分の暮らしを始めた彼女が、父親が死んだというのでこっちへ帰ってきて、自分の通った神戸女学院のときのことをちょっと思い出す。制服のない中学校だったということを書いています。入学式のときに、母がつくってくれた赤いワンピースを着て行ったということが書いてあります。そういうような作品がキョウコ・モリさんで検索していただければ出てくると思います。

今日はもう少しポピュラーな作品を扱いたいと思います。神戸女学院生が最初に文学に出てくるのは、田山花袋の『蒲団』という作品です。このことは、神戸女学院は伏せていたいというか、あまり言ってほしくないという話を聞いたことがあります。『蒲団』というのは、田山花袋が明治40年に発表した作品です。自分の内弟子にしてくれと当時の神戸女学院生から手紙が来る。父親の許しを得たなら構わないということで、神戸女学院を中退した女性が上京して、この文学者のところで修行しているが、ほかに恋人ができています。いまでしたら、ボーイフレンドができて、その方と深いお付き合いをするというのはごく当たり前で、映画の『阪急電車』を見ても、ごく当然のことながらそうになっているじゃないですか。ところが、明治40年ですから、そういうことは非常にはしたくないことで、それでこの文学者が親元に連絡をして内弟子を親里に帰す。主人公の作家さんにしてみると、内弟子だった女性にほのかなる愛情を抱いているわけです。彼女は20歳か21歳ぐらい、彼は35歳ぐらいで、15歳か16歳下の女性です。自分は妻子もあるし、彼女には恋人もいるから第一線は超えてはいけないと思いながら、自分の弟子を愛していたとか、心を寄せていたが、その女弟子を国元へ帰してしまった。そのあとで、その神戸女学院を中退した弟子が使っていた蒲団を引っ張り出して、そのにおいをかぎながらその作家が泣くという、ちょっと気持ちの悪い作品です。私は好きじゃないんです。神戸女学院もあんまりこの作品を好んでいないという噂を聞いておりますが、まあ、それだけの話です。

だいたいこの物語は20字以内で要約できると思います。ただ、これが明治40年にちゃんと神戸女学院という名前を名指しで出しているんです。芦屋女学院とか、女学院というんじゃないくて、神戸女学院と実名が出ていますから、神戸女学院の生徒というのはこんなに性、つまりセックスですね、性に対して奔放

なのか、自由なのか、自由勝手気ままなのかというイメージが出ちゃったわけ
です。それで、神戸女学院という名前はアピールはできたんですが、同時にそ
ういう性的に、あまり我々にとっては快くないイメージまで広くアピールされ
ちゃったなど。でも、だからこそアピールできたというか、だからこそみんな
読んだんだろうと思うんですが。

この作品について、モデルがもちろんいます。これも公然の事実で、いろん
なものに書いてあるので、個人情報も何もないと思いますが、岡田美知代さん
という神戸女学院在学中だった方が上京して田山花袋の弟子になったうんぬん
といういきさつがあります。それについて文芸評論家の小谷野敦さんは、ヒロ
イン、この弟子になった女性、岡田美知代さんはそんなに美しかったのかと書
いています。写真で見た限りは、果たして、この程度で美しいだの、華やかだ
のとは言えるかなど。要するに、この程度の顔だったら、田山花袋が本気にな
って愛したかどうかと言わんばかりの言い方なんです。それは失礼だと思うん
です。人間の愛はそんなもんじゃない、美しいから愛されるわけじゃなくて、
不細工だから愛されないわけじゃないですね。

そのいい例が、恋のために王冠を捨てたというウィンザー公・エドワード
8世の相手のシンプソン夫人で、はっきりいって不細工だと思いませんか。ち
っともきれいだと思わないわ。それから、チャールズ皇太子と結婚したカミー
ラ、いまコーンウォール公爵夫人とっていますが、彼女についても同様です。
だから、きれいでないから恋愛しないということはあり得ないんです。先ほど
も言いましたように、きれいか、きれいでないかというのは、きれいに見える
か、見えないかというそれだけのことなんです。田山花袋がそう思おうが、思
うまいが、放っとけよと思います。とにかく、田山花袋の『蒲団』が神戸女学
院の生徒が文学で出た最初だと思います。私も全部チェックできているわけ
ではありませんが。

さて、神戸女学院とは関係ありませんが、谷崎純一郎の『痴人の愛』に注目
したいと思います。これは何を言いたいかというと、お嬢様にはお嬢様の品格
があると思うんです。ナオミと譲治さんとが鎌倉に行きますが、そのときに本
物の御令嬢と一緒にになります。そうして御令嬢とナオミとを比べてみると、「社
会の上層に生まれたものとそうでないものとの間には、争われない品格の相違
があるような気がしたのです」とある。「品格」という言葉にチェックしてい
ただきたいわけです。やっぱり品格の差が出ないとお嬢様ではないのだというん
です、逆にいえば。近年、品格というのは、『女性の品格』とか『国家の品格』
という本がベストセラーになって、えらい品格ブームになりまして、品格とい
う言葉の品格が落ちているような気がするんですが。品格を感じる、感じない、
これも感性によって違いますが、正直なところ、イギリスのアン王女と握手し

たときに、それほどびっくりするような品格は感じませんでした。ダイアナ妃も10メートルぐらいの距離で見たことがあります。ロンドンでバレエを見たときに、ちょうど彼女が応援しているバレエ団だったので、ダイアナ妃がいらっしやっていました。きれいにはしていらっしやいました。ただ、皇太子妃だからご立派でおきれいなんですが、ちょっと品格というのとはまた違う、もうちょっと違うんだよなあと思っていました。

3年前に東京プリンスホテルのあるパーティーで、主賓テーブルに座らせていただいたんですが、そのときに最初にスピーチされる方、ということは主賓ですね。その最初にスピーチされる80歳近い堂々たる紳士、この方は本当に立派な紳士ですが、その方の横にいらっしやる奥さまがものすごいオーラを持っていらっしやったんです。別に仕事をしている感じでもないのですが、最初に「堀江先生でいらっしやいますね。いつも書いていらっしやるもの拝読いたしております」と。その方は聖心女子大学のご卒業ですが、「神戸女学院出身の方は東京でも大変活躍していらっしやるので、私どもは女学院マフィアと呼んでおりますのよ」と。マフィアです。ある方が、神戸で有名なものは山と海と組だと言われたんですが、その「組」の扱いになっていて、マフィアと。そういうふうなユーモアがある方なんです。食事中もお話をさせていただいて、すごくユーモアがおありになって、偉そうにされないし、でも、すごくオーラがある。仕事をしていらっしやるわけでもないし、何者かなと思って、次の日、早速、交詢社の紳士録で調べたんです。だんなさまのお名前が分かっているので、そこから引いたら奥さんの素性が分かるじゃないですか。素性が分かりました。美智子皇后の妹さんでした。すごいオーラでした。これこそがお嬢様オーラだなと思いました。本当に。

余談ばかりしていますが、そういうふうなお嬢様オーラというのが、やはりある。それが品格である。それはやはりさまざまなものによって培われていく。そこには財力というのももちろんある。

ということで『華麗なる一族』です。これもよくご存知の話だと思いますが、万俵家では一族がそろった晚餐の席では、今夜はフランス語、明晩は英語の会話でというのが一種の習慣のようになっていた。わあ、すごいと思ったんですが、このフランス語を用いたシーンはここだけで終わります。このあと、晚餐のシーンで英語やフランス語が一切使われていないんですよ。使われたら困るんですが、読者としては。ですが、これでは一回だけじゃないのと思って、ちょっと噴き出したんです。ただ、これが発表されたとき、私は大学の1年生でした。これはえらいことだと。2009年に私が出した『いい加減な人ほど英語ができる』という本にいろいろ書いていますが、私どもが英文科に入ったときに、『Our Collage』という英語の冊子を渡されて、それがテキストでした。いま

はそんなことしているか分かりませんが、そのなかで、卒業生の多くは国内外のVIPの奥さんになっているという意味のことが書いてあるわけです。当時は、「男女雇用均等法」がないですから、女性が就職しても腰かけにすぎない。自分で事業をされる方でもそんなにはいない。先生になられる方ももちろんいらっしゃいましたが、非常に例外的な存在でした。ということは、最終的には結婚なんです。結婚する限りは、相手はお金があるに超したことはない、当然ながら。そうすると、やはり万俵家のようなところに結婚するには英語はもちろんのこと、フランス語もやらなくっちゃというふうに大学1年生の私は思ったわけです。私だけではなく、当時そう思った人が『華麗なる一族』の影響で多かったようで、私の学年では英文科だけれども、フランス語を大阪の日仏学院などに習いにいくようになったクラスメートは少なくなかったです。私自身は大阪の日仏学院には行かずに、いきなり夏季研修ということでソルボンヌ大学で研修してきました。だから、多少はフランス語も話せて、これで華麗なる一族と結婚できると思ったんですが。

2年前か3年前に木村拓哉が演じていた『華麗なる一族』のときは、妹は一子と二子、二人しか出てこなかったと思います。しかし、原作では三子まで出てきています。いつも山崎豊子の『華麗なる一族』を話すときにと思いますが、一子、二子、三子、これ三人で終わったからいいですが、四人目ができたらどうやって読むんだろうと思います。あと付けの名前だからこそそのネーミングですね。それから、ご存知のように男性は鉄平でしょ、銀平でしょ。これも二人だからいいけれど、三人目ができていたら金平になっているのでしょうか。すぐこういうことで突っ込みたがるのが私の悪い癖なんです、とにかく三人お嬢さんがいらして、一子、二子、三子お嬢様でございます。

それから銀平の縁談について、「東京のお姉さまにお話になりましたの」と二子が尋ねると、当主の万俵大介が「うん、大阪重工の安田さんのお嬢さんの方に決めた」と言い、「お前たちと同窓だし、気心が知れているんな意味で好都合ですねと言っていたよ」というところがチェックポイントです。「お前たちと」なんです。「とも」じゃないんです。「とも」だったら、細かいことを言いますが、お前たちとも同窓だしと言われたら、この三人と万樹子さん、全員同窓だということになります、お前たちと同窓と言われたら、一子さんだけは違うのかな。違う学校だったのかなと思うのが可能ですよね。安田万樹子さん、この方は銀平さんと結婚することになりますが、「そうなの、安田万樹子さん、私と同じ英文科だったからよく存じ上げているわ。大変なスキーヤーで、学生時代から冬休みにはフランスのモンブランに滑りに出かけた方やったから、よく目立ったわ」と二子が言うと三子も「そうね、美人やけれど、少しばかりお派手はようやわね」。つまり、英文科というわけですね。

次に、いよいよ銀平さんと万樹子さんがデートをするようになります。さすがに場所は大阪のロイヤルホテルでございます。ただ、当時は「もちろん」です。いまでもどんなに外資系のホテル、東京系のホテルが頑張っているでも大阪の旧財界の方、もともとの資産家の方はロイヤルホテルがお好きなようです。リーガロイヤルと名前が変わってもロイヤルホテルと言っているのが普通かと思えます。そこでデートをしているんです。グレコのシャンソンを聞いていて、万樹子が「いいわね、まるでパリのナイトクラブにいるみたい」。キザだと思いいになるかもしれませんが、これは普通なんですよね、悲しいかな。こういうことがごく普通に言えるわけです。例えば、三宮の居酒屋というのとパリのナイトクラブというのは、この方にとって同じことなのです。ただ、この方は三宮の居酒屋には一切行ったことはないであろうと。パリのナイトクラブは行ったことがある、それだけのことでして、別にいい格好をしているとか、自分が金持ちであることを見せびらかしたいとか、そういう気はないはずなんです。ただ、言葉で見たらいかにもきざっぽい、いかにもいやらしいとひがみたくはなりますが、もっと自然体と思ってください。

これと似たようなことがうちの母にもありました。うちの母が84歳で神戸の有料老人ホームに、いざとなったときに介護が受けられるようにと思って説き伏せて入ってもらったんです。85歳になったときに、行ったら悲しそうな顔をしているんですよ。お母さまどうしたの。いつもうちでは、お母さまと呼んでおりました。万俵家とそこだけは同じでございますが、お母さま、どうしたのって言ったら、「私ね、ピンポンが下手になったの」と言うんです。老人ホームでピンポン台を組み立ててやるらしいんですよ。「うん。前はね、うちにピンポン室があったから、私、すごく上手だったのに」と言うので、「お母さま、それはいつのこと」と尋ねると、「私が15歳、16歳のときかしら」と言いました。「それ、70年ほど前のことですよ。70年たったら下手になるわよ。それよりも、戦前でも家にピンポン室があったなんていうことを人に言わないでよ。どう思われるか分からない。お母さまにとっては自然体で、家にマッチがありますということと、家にピンポン室がありますと同じレベルかも分からないけれど、人によったら、それでお母さまがすごく自分がお嬢様育ちだということを自慢しているように聞く人もいるんだから」と強くいさめてきました。分かっているか、分かっていないか、亡くなったからどうしようもないんですが、そういうことがありました。ある種、怖いもの知らずといえますか、なんでも言っちゃうんですね。

『華麗なる一族』に話を戻しましょう。万樹子さんが元のクラスメートと会う場面です。「万樹子さん、ごきげんよう。あら、ごめんなさい、お邪魔して」「いいのよ、ご紹介します。私のフィアンセの万俵銀平さんですの。こちらは

女学院時代の同窓生の」という、ここで女学院が出てきたんです。だから、二子、三子、万樹子、これは全部、女学院といえば神戸女学院です。少なくとも阪神間ではそうです。大阪では大阪女学院、広島では広島女学院かもしれませんが。ここでは神戸女学院こそが女学院です。ようございますね。ですから、「女学院ですの」ということで、ここで神戸女学院ということがはっきりしたかと思えます。

この万樹子さんが結婚後、万俵家の屋敷で二子を捜していると「若奥さま、二子お嬢様は朝からフランス語とピアノのおけいこでお出かけですけど」とお手伝いさんに言われます。これが二子さんのお嬢様らしいところなんです。英文科卒だから、英語はできるのは当たり前、でもフランス語も要る。そしてピアノも要る。いまお嬢様かどうかの一番分かりやすい見分け方は、爪です。ピアノを弾く人は、爪は伸ばせない。だから、爪が伸びていたらピアノが弾けない、ピアノが弾けないのはお嬢様ではない。あるいは、バイオリンです。バイオリンの場合はもう少し爪が長くても構いませんが、あまり付け爪が、魔法使いのお婆さんみたいになっていると、バイオリンも引っかけます。だから弾けない。お嬢様はだいたいピアノを弾くものです。ですから、現代では爪を見たらお嬢様かどうか、元お嬢様かどうか分かるかなと思っているのが私の一応の基準です。あくまで私なのですが。フランス語とピアノ。

ところで女学院とはあまり関係がありませんが、万樹子さんもこの万俵家の女たちというのは、ある種、『細雪』を彷彿とさせる、つまり何を着て、何を食べて、何をして遊ぼうかという、それしか考えていないところがある。一方、男たちの方は、どうやって銀行を乗っ取ろうか、どうやって生き抜こうか、サバイバルゲームです。その橋渡しをしているのが家庭教師兼万俵大介の愛人である相子さんというふうに私は見えています。

さてあるとき、東京に二子さんが遊びに行くんですが、さっさと帰ってしまいます。「明日帰るんだって、もう一泊して帰ればいいんじゃない」って言うと、「ところが明日は女学院の同窓会があるから、8時の新幹線で帰らなきゃならないの」と女学院の同窓会、女学院というのが出てきます。それから、「あら困るわ、私はそんな気持ち全然なくってよ。それに明日は女学院の同窓会があるから」って女学院の同窓会を2回もこの小さな場面で出てくるんですね。それだけ女学院、女学院というのを出すことによって、お嬢様というセレブな雰囲気を出しているのかなと思います。

一方、せっかくのセレブ婚でしたが、この万樹子さんと銀平はうまくいきません。そして万樹子さんは流産をしてしまって、実家へ帰ってしまいます。銀平さんが迎えに来てくれたら帰るけれど、銀平さんは全然もう万樹子さんに興味ないので行かないんです。万樹子さんはそのまま離婚しちゃうんですが、離

婚する前に二子さんが遊びにいきます。そうすると万樹子さんはゴルフの練習をしている。しかも家でゴルフの練習をしている。つまり、家でゴルフの練習ができるほどの庭があるわけです。私も女学院のクラスメートでいましたね。芦屋ではなくて箕面でしたが、家のなかにゴルフのちょっと練習できるところがちゃんとありました。ふとそれを思い出しました。

また芦屋の山手町の話になりますが、私のクラスメートで芦屋の山手町に住んでいた、本当にいいお嬢様ですよ。これも自慢する気は全然ない方ですが、お美しくて、お優しくて、頭もおよろしくて、お金持ちなんで、天はどうしてこんなに不平等なのって思ったんですが、その方が、あるとき私に「広いお家って嫌よ」とおっしゃるんです。そのときうちの家はとっても狭かったんで、これは嫌味かしらと思ったんですが、そうではなくて、あとから芦屋の地図を見てその方の番地を見たら、ものすごく広いんですよ。これだけ広がったら気持ち悪いよね。どこに泥棒が入っても分からないもんねと、あとから分かったんです。あれだけ広がったらゴルフの練習でも野球の練習でもできたんじゃないかと思います。

『華麗なる一族』から少し時代は前になります。1960年に発表された『自由ヶ丘夫人』に注目したいと思います。『自由ヶ丘夫人』が書かれる前に、この武田繁太郎という作家は『芦屋夫人』という作品を書いております。この時期には何々夫人、『武蔵野夫人』とか何々夫人というものが結構流行しました。それを私が以前に『人妻の研究』というもので書きましたが、もともとはもっと古くに『鎌倉夫人』という作品を別の作家が書いていました。多分それをもじったんでしょう。丸尾長頭が『芦屋マダム』という短編小説を昭和の初めに発表したことがありました。それが『芦屋マダム』という言葉の由来です。武田が書いたのは、『芦屋マダム』ではなくて、『芦屋夫人』ですが、戦後に発表しました。女学院生ばい、ひょっとしたらこの人は神戸女学院の卒業生かもというのが脇役でちらっとは出ますが、別に「K 女学院」も何も出てきませんし、その作品の主人公は絶対に神戸女学院出身ではないんです。

そのあとに書いたのが、『自由ヶ丘夫人』です。それから『銀座夫人』という作品も書いたんですが、これが手に入らないんです。『自由ヶ丘夫人』もいま読めるのは国会図書館だけです。それほど、高級な文学ではないんですよ。高級な文学じゃないから、再版されたりとか、いろんな全集に入ったりとかいうことがなくて、そのときに売られてちょっと売れてそれで終わりになっちゃった。国会図書館もいったん買ったものは絶対廃棄しないでずっと置いてあるから、日本で出版されたものは、全部あそこに入っていることになっていますが、それでも『銀座夫人』は行方不明なんですよ。買ったことは入ったが、行方不明なんです、チェックしましたが。ほかの図書館は、芦屋にしても西宮にしても

スペースが限られています。毎日、毎日、あれだけ本が出版されているわけですから、古くなって汚くなって、これは大して文学的価値がないと思ったら捨ててしまうんです。だから、一時はひょっとしたら『自由ヶ丘夫人』は入っていたかもしれないが、何かの段階で廃棄されていることが多いので、私もいろんなところにチェックをかけましたが、いま読めるのは国会図書館だけで、しかも貸し出しは一切してくれませんから、読みたかったら東京まで行かないといけない。千代田区永田町まで行かないといけないことになります。

筋は大したことありません。また 20 字以内になるかどうか分かりませんが。淳子というのが主人公です。「芦屋に住むようになったのは淳子が生まれる少し前」ということは、芦屋生まれの芦屋育ちなんです。そして、「ちょうどいまから 10 年前、淳子は K 女学院の専門部に在学中」、このときにいまの夫に見初められて、20 歳で中退して結婚する。私どもの先輩には大学に行っても、中退する方は結構多かったようです。中退して結婚するというのは、べつに普通だったようですから、この方もそうだったんです。この K 女学院というのは、やっぱり神戸女学院としか思いようがない。この夫はといたしますと、実業家でしかも国会議員、セレブです。東京の自由ヶ丘に邸宅を構えて、子どもはいますが、PTA 関係のお母さま方と一緒に遊んでいらっしゃるという状況です。

ところが、淳子の母親というのがものすごい発展家です。この人は K 女学院出身とは書いていませんが、戦争中、神戸のホテルで外人と浮気現場を憲兵に押さえられているとか、あるいは戦後はアメリカ軍の高級将校と浮気しているとか、父親は球団を持っているある電鉄の重役ということになっています。当時は、ほとんどの電鉄が球団を持っていましたから、どことはいえないです。別にモデルがあったというわけでもありませんが、それだけお金のある家で、でもお母さんはそんなふうには浮気性でという。そのお母さんは死んでしまっていますが、それからいうとお母さんは外国人と浮気をする、あるいはアメリカの高級将校と浮気をするのだから、結構外国語には堪能でいらしたし、社交的でいらしたという、ひょっとしたら K 女学院と想ったりもしないではないですが、そこは書いていないので助かっております。

この淳子さんは、このあとやっぱり浮気をするんです。浮気相手の男性が、初めは自分が国会議員の奥さんと浮気をしているというわけで、自分は色事師というか、自分は二枚目というか、ちょっとジゴロのつもりでいるんですが、やがて淳子さんにもて遊ばれているということが分かって、この浮気相手の男性が狂言自殺するんです。本当に死んじゃいます。力余って。それがスキャンダルです、言ってみれば。実業家で国会議員をやっている夫の方は、愛人スキャンダルが発覚します。両方とも週刊誌沙汰になります。

普通でしたら、恥ずかしくてどこにも行けない。世間さまに顔向けができな

いという状況になると思いますが、そこがお嬢様の強さというか、怖いもの知らずなんですね。かえって堂々としていると夫にも言われるんです。そんなとき、ダンスパーティーを淳子さんのお友だちグループが盛大にやる。けれども、「こんなスキャンダルがあったら、来ないわよね」「あの人来るかしら」「来ないでしょう」ということをお友達が言っています。そしたら、「まあ、いらしたわよ」と。一斉にみんな入口の方を見るわけです。そこには、池上淳子がいて、また派手な格好をしているわけです。クリーム地の。それに大輪の真紅のバラを散らせた可憐な訪問着で。その豊かな体を飾った彼女は、以前の彼女と微塵も変わらないあでやかな微笑みをたたえながら、ゆったりした足取りでホールへ入っていったと。できるだけ派手に、こそこそと来るんじゃなくて、できるだけ派手な格好で堂々と入って行ってゆったりとしてにっこりとしている。にっこり笑っていると余裕があるというふうには人は錯覚しますね。

私は神戸大学の大学院の面接のときに、にこにこしていたので、この人は大物なのか、アホかどっちかと思われたらしいのですが、にこにこしているのは余裕でございます。「期せずして、ホールの視線は彼女に集中した。だが、彼女の表情にはいささかも臆するところはない」。臆するところがない、怖いもの知らずなんですね。堂々としている。「彼女はこの夜のパーティーの主賓でもあるかのように、周囲の見知った顔ににこやかに会釈した。その態度は立派だった。見事だった。そのとき、パーティーの開幕を告げる華やかなバンドの音が響き渡った」とここで終わるんです、この話は。要するに、道徳的に良い悪いじゃなくて、いかに堂々と、オーラを発散させながら彼女が生きていたか。K女学院中退生でございます。別に実話ではございませんので、お気になさらないように。そういうふうには描かれている。見る人が見たらこのK女学院は神戸女学院だと思われるであろうということです。

さて、最後は片岡鉄平の『花嫁学校』で、とても古くて、1934年に『朝日新聞』に連載されました。これが好評だったものですから、『続花嫁学校』というのも『週刊朝日』で連載されることとなります。ここでは、最初の場面で、41歳の奥さまがバザーに出かけるために支度をしています。ベッドから旦那さんがこういう言い方をします。「朝っぱらから満艦飾でどちらへご出勤かいな」。満艦飾ってわかりますか。若い方は分からないかもしれませんが、満艦飾の艦というのは軍艦の艦なんです。だから、お祝いの日には軍艦を飾りたてたんですね、昔は。だから、えらい飾りたててということですが、朝っぱらから飾りたてていったいどこへご出勤かいな。まるでバーのホステスのようなと言わんばかりに、ご出勤かいななんです。そうしますと、「今日は私の母校のバザーですよ。登枝が連れていってくれと言いますし、私だってたまには古いお友だちにも会いたいわ」と説明します。登枝は彼女の娘ですが、41歳の母親という、

登枝さんも20歳ぐらいでしょうか。登枝さんのお友だち、佐伯のお嬢さんがいらっしやいます。そうしますと、「良いところへ来てくれたね。うち、女学院のバザーに行こうとしていたところやわ」「そんならちっとも良いところやあらへん。誰か一緒に行く約束した人があるのんやろ」「そらあるわ」という、こういう言い方ですが、女学院のバザー。ふとここへ来たときに、今朝から気になっていたんですが、女学院がここに移転したのは、いったいいつでしたと先ほど事務長さんにうかがったんですが、これが書かれたのが1934年でしょう。移転は1933年だと言われたんです。そしたら、このバザーでオッケーなんだ。だからぎりぎりなんですよね。

次がバザーのシーンです。「赤土の坂をまばらな人の列に混じって上っていくと、林の間からクリーム色の洋館があらわれてきた」。このあたりはこの岡田山の感じは出ているなと思っています。だけれど引っ越し前の話だったらどうしようと思ったんですが、ぎりぎりこのバザーの感じにはなっているなと。年代的には間に合うなとは思いますが。昔のこの女学院のバザーをほうふつとさせるような雰囲気描かれています。

登枝のお母さんの方は女学院出身ですが、ただ、このバザーに結局お母さんは行きません。もともとお母さんの実家がすごく金持ちで、お父さんはその丁稚さんで、このごろ丁稚というのは差別用語で使ってはいけないといわれていますが、その丁稚奉公をしていました。そして頭角を現した男と娘を結婚させた。だから、娘は嫌々結婚した。女学院を出た娘ですが、嫌々その丁稚上がりの優秀な男と結婚した。そういう筋書きです。でも娘ができていて、41歳になっていますが、丁稚上がりの婿というか、男が計画倒産をするんです。計画倒産をして自分の資産を隠すんです。また別会社をつくってやり直すということも計画していたんです。だから、バザーに行こうと思っている奥さんに、うちはもう倒産やと言って。そうするとバザーどころじゃなくなって、お母さんは行く気をなくしちゃうんです。娘だけがお友だちと行って、そして男性と知り合うというところなんです。

バザーの場面では、「アイスクリームでも飲みましょうか」とあります。アイスクリームって飲むものだったんですね。お嬢さんは女学院の出身ではなくて、お母さんが女学院の出身で、だから、お嬢さんはこのところで「こんな学校で制服の少女時代を送る人はうらやましいわね。本当に青春らしい青春って感じがして」と言っています。制服はなかったんですがそういう言い方をしています。このあともずっと読んでいただきましたら、いかにも女学院の美しさ、ロマンチックで快適でどうのこうのという描写があります。この描写の方が、私としては個人的に、キョウコ・モリさんの生物の実験室に行ってカエルのホルマリン漬けを見たとか何とかいうのより好きは好きです。

かつてのといっても昭和9年、ロングロングタイムアゴーなんで、私がここへいた時代に比べましても、その40年ぐらい前ですが、いまのバザーとはずいぶん雰囲気が違っているかと思います。私が在学していたときのバザーというのは、新しい夏のワンピースをその日に着るという、べつに規則ではありませんが、何かそういう伝統がありました。その日から衣替え。世間がいつ衣替えしようと、その日から夏の衣装、その日から夏のワンピースという伝統がありました。言い伝えですから、学校が決めたわけでは決してございません。しかもおニューなんです。新しいものです。ですから、私どもは親にねだっていつも4月ぐらいからデパートとかあちこち回り、お仕立ての方はお仕立て屋さんに注文されたかと思います。バザーの日というのは、ちょうど先々週の土曜日だったかと思いますが、台風が来るかどうかの日でしたか。すごい日でしたよね。私は来なかったんですが、ごめんなさい。

このごろはあまり新しいワンピースで超おしゃれしていらっしゃる方は見かけませんが、私どもが在学中は4月ぐらいから、5月のバザーには何を着て誰と歩こうか。要するに、ボーイフレンド招待するわけですよ。そうしたら、とにかく見栄えのするボーイフレンド。素敵な男性と歩いてたわねと言われたくないじゃないですか、頭は空っぽでも。とりあえずは。頭の中まで見えないんですから。だから、とにかく何を着て誰と歩くか、それしか頭になかったですね、4月、5月というのは。同窓生の皆さま方もそれこそ満艦飾でしたよ。どこのパーティーにお出かけというようなお衣装で皆さんいらしていましたし、在学生も思いっきりおしゃれをして、それをまた拝見するのも楽しゅうございました。皆さまがそうやっておしゃれしていらっしゃるのを見るのは楽しいです。最近のバザーは言っちゃ悪いけれど、なんだか昔のバザーというよりは、そのへんの蚤の市に行くような。ごめんあそばせね。でもそれから比べると、ここに書いてあるこれの方がいかにもきらびやかで、古き良き女学院というのを思い出させてくれるものだと思います。

簡単に話の筋を説明しますが、この登枝というお嬢さんは怖いもの知らずです。だいたいお嬢様というのは怖いもの知らずです。家が貧乏になると聞いたとたんに、自分の名義で貯金してある2,500円という、当時としたら大金なんです。それを引っ張り出してきて、株に投資します。いきなり素人なのに。それを10万円に増やします。2,500円を10万円に。ところが、高いときに売れと言われたのに売らなくて、期を逃してあっという間に150円に下がります。要するに2,500円が150円になったんです。それでも平気。それを聞いてお父さんは卒倒して死んじゃいます。お母さんは和歌をやっていますが、その和歌の関係で東京へ出て銀座で酒場をやったり、そこを失敗して若い男性とくっついていたりして、これもまた自由気ままに生きていきます。そういう女学院生でご

ざいます。

そのようにお嬢様というのは、文学ではこんなふう描かれています。これは特殊な例だと思います。大概の方は、お幸せに、お静かに、上品に、人に迷惑もかけずに過ごされていると思いますが、それだとお話にならない、文学にならない。文学になるというのは、特殊な例だとお考えいただいたらと思いますが、その特殊な例が、イメージをつくっちゃうという危険な一面もございます。そのようなこともお考えいただきまして、これから文学の中のお嬢様をちよっと注目していただけたらと思います。ご清聴ありがとうございました。

(終了)